
日本ロシア文学会第48回定例総会 および研究発表会に参加して

堤 正 典

1998年度の日本ロシア文学会の定例総会および研究発表会が10月23・24日の両日に東京大学本郷キャンパスの山上会館をメイン会場として行われた。日本ロシア文学会は「ロシア語・ロシア文学の研究および普及によって、日本文化の健全な発展に貢献することを目的と」している（会則第2条）。会員数は約500で、会報の発行（年3回）、学会誌『ロシア語ロシア文学研究』の発行（年1回）、学術上の国際交流などの活動を行っている。全国単位の活動の他に、全国を六つのブロックに分け、それぞれの地方支部も活発な活動を行っている。また、本年インターネットにおいてホームページを開設し、これについては今後の充実が期待される（<http://www.geocities.co.jp/Berkeley/1632>）。

今回の研究発表会では、第一日の午前と第二日の午前・午後のロシア語学・文学・演劇・思想などに関して三つの会場において30の発表があり、第一日の午後はワークショップという形式で「現代ロシア文学研究・紹介の現状と問題点」・「初歩のロシア語教育」・「ロシア語とコンピュータ」の三つのテーマのもと、それぞれ会場を分け、報告・質疑応答・意見交換が行われた。ワークショップという形式は、従来個人の研究発表のみであった研究発表会において、会員に広く共通する問題としてロシア語教育をテーマに前々回より設けられていたが、今回はさらに二つのテーマが加わった。

筆者が出席したのは、ロシア語学に関する個人の研究発表と「初歩のロシア語教育」をテーマとするワークショップである。ロシア語学の分野でのそれぞれの発表は音声学から統語論・意味論までバラエティ豊かなものであった。また、ロシア文学会の会員にはロシアのみならず、その他のスラヴ地域や中東欧地域、さらに旧ソ連内の諸地域をも研究対象としている研究者も少なくなく、それを反映して、リトアニア語やポーランド語に関わる発表も行われた。

「初歩のロシア語教育」のワークショップは、今回他の二つのテーマと同時進行だったため、これまでの二回に比べると参加者が寂しいものになってしまったが、内容は重要なものであった。七つの報告があり、各大学での教員のロシア語教育についての工夫が紹介された。会場からは、英語以外の外国語教育を高校レベルから普及させる運動をしてゆくべきとの意見も出された。大学によっては非常に限られた時間でロシア語教育を行うように制限されており、さらにロシア語教育を困難にしているようである。本学の外国語科目は初級から中級・上級へと進めるようになっており、比較的充実した教育が行えるはずである。これを学生諸君に有効に活用して勉強してもらうには、やはり教員による工夫が大切であることをあらためて実感した。